

保育留学準備と英語力のつながり

The Connection Between Childcare Study Abroad Preparation and English Proficiency

松 崎 真 実
MATSUZAKI, Mami

キーワード：保育留学、英語力、英語学習

1. 目的

近年、日本の少子化がさらに進んでいる。厚生労働省の人口動態統計月報年計¹⁾によれば、出生数は72万7277人で、合計特殊出生率は1.20であり、前年の1.26より低下している（2024年9月現在）。東京都に限れば、0.99となっている。理由として、東京は生活費が高いことなどから出生率が低い傾向があり、地方からの若い女性の東京流入が、日本全体の少子化に拍車をかけている。

その一方で世界情勢は大きな変貌を遂げている。出入国在留管理庁によれば、令和5年6月末現在における中長期在留者数は293万人、特別永住者数は28万人で、これらを合わせた在留外国人数は322万人となっている。国籍別には中国が最も多く、次いでベトナム、韓国と続いている。在留資格別では「永住者」が88万人（対前年末16000人増）と最も多い²⁾。保育の現場においても、多国籍の園児がいることは珍しいことではない。子ども達が最初に入る社会として、幼稚園や保育園は大きな役割を果たす。子ども達が必要最低限の言葉のみで入園し、そこから言葉だけではなく、文化的側面も学ぶ困難さは保育者の話からもよく出る。令和3年の文部科学省の調査によれば、日本語指導が必要な児童の数は過去最多に上っており、児童の母語はポルトガル語が最も多い³⁾。このように入国制限があったコロナ禍においても、日本語指導が必要な児童数は増加している。令和5年5月、日本政府は新型コロナの感染症法上の分類を5類に引き下げた。コロナ禍で一度は止まったように見えた国際的人材の移動がまた大きく動きだし、外国人の入国も増えている。このような社会情勢の変化に合わせ、保育者となる学生も多文化共生を理解し、英語のみならず多言語を話す人材が求められる。このような背景を鑑み、本学は、オーストラリアの保育資格の取得を目指す11か月間の保育留学プログラムを2022年度から始めてい

る。滞在地のオーストラリアクイーンズランド州にて、学生は15週間の語学研修を受け一定の英語水準に達したと認められた後、29週間の保育留学プログラムに派遣される。保育留学プログラムでは実際に現地の園での実習や課題を行い、クイーンズランド州政府が要求する単位を全て修得する。単位の修得と実習が修了すると、オーストラリアの保育資格である Certificate III in Early Childhood Education and Care が授与される。この資格はオーストラリアの保育所で職員として働くために最低限必要な資格である。留学希望の学生は3年生から筆者が受け持つ留学予定者対象のゼミナールに配属され、留学を共にする仲間と年間を通して、英語、多文化共生、留学先のオーストラリアについてのレクチャーを受ける。加えて、秋学期からはオーストラリア国籍の講師による本場の伝統や食文化も体験的に学修する。留学を目指す学生達はこのような経験を通じて、お互いに支え合う関係を形成し、その関係を密に保ちながら、オーストラリアでの11か月間の学びに繋げていく。現在、留学2期生がオーストラリアで保育実習を行っている。

オーストラリアは移民による人口増加が全体の人口を押し上げている。2021年の国勢調査によれば、オーストラリアの総人口は約2,550万人で、前回調査（2016年）と比較して、8.6%増えた。オーストラリア統計局によれば、オーストラリアの人口は増加を続け、文化的に多様な国へと変化していると言及した。その理由として、2017年から4年間でオーストラリアが海外から受け入れた人口は合計約102万人だったことを挙げる。また、海外で生まれた者または両親のどちらかが海外で生まれた者は、総人口の51.5%である⁴⁾。このように日本とは全く異なる多文化共生が行われる一方、日本と同じように治安も良く、差別的行為によるデモ問題が顕在化していない。隣国のニュージーランドと共に、日本の課題である多文化理解や多国籍の保護者対応の専門的知識を持った保育を学べる場である。

その一方で近年移民の増加による物価の高騰が社会間

題となっており、それに対応する政策の一環として、ビザに対する規制が行われつつある。2023年度だけで何度かビザ規定の変更のアナウンスがあり、その中には英語力規定、学生ビザ料金の大幅な値上げも含まれている。現状、日本の学生ビザへの直接的な英語力規定はないものの、今後の動向は予想しづらく、学生の英語力の向上が望まれている。

オーストラリア留学のための英語力強化が今までより一層望まれる現状において、本研究では、オーストラリア政府が求める英語力を調査する。また、本学の学生の状況調査として、留学前の学生の意欲を英語能力面から測るために、留学を志望する学生としない学生の英語力を英検 IBA を用い、リーディングとリスニングに分けて差異があるかを調べる。さらに留学開始前から1か月おきに学生から得た英語学習によるアンケートで留学生の英語学習へのモチベーションの変化と保育留学における英語学習の課題を調査する。このことから留学へ向かう学生の英語面での困難さを理解し、適切な指導に繋げる。

2. 研究の方法

研究方法として、オーストラリア政府が求める保育士の資格と英語力規定を調査する。また、本学の留学希望者と希望しない学生の英語テストでのスコアを調べ、2群の間に明らかな英語力の差があるのかを調べる。また1年生の英語学習へのアンケートから英語学習の課題について考察する。さらに留学後の学生に行った1か月ごとの英語学習へのアンケートから、英語学習への取り組みでその時期ごとに学生が感じた課題について考察する。これらの考察から、次年度以降の留学予定者が日本で行う課題について検討する。

3. オーストラリアで保育士として働くために必要な資格と英語力

オーストラリアではコロナ禍で多くの留学生在が帰国するという事態が起こった。その反動もあり、コロナ後は大量の学生が大挙して押し寄せ、2022年～23年の間に移民数が過去最高の51万人に達した⁴⁾。それにより家賃の高騰や物価の上昇が起きていると考える国民が多い。そのため、オーストラリアは2023年12月に留学生と低技能労働者のビザ規則を厳格化すると明らかにした。豪政府は同国の移民制度は「崩壊した」との認識を示しており、今後2年間で移民受け入れ数を半減させることを目指している。この新たな政策の下では留学生は英語テストでより高い点数を得る必要があり、2回目のビザ申請には

より厳しい審査が課されることになる。オーストラリアで英語学校のカウンセラーとして働いている A 氏によれば、2024年は一番学生ビザが取りにくいという。

一方、オーストラリアでは保育士不足も問題になっている。オーストラリアで保育士として働くためには免許が必要である。簡易な資格から順に挙げると、本学の学生が取得する Certificate III in Early Childhood Education and Care、次に Diploma of Early Childhood Education and Care、日本の4年制大学の資格にあたる Bachelor of Education となり、それぞれの資格により、給与もできる業務も異なる。現地の保育士 B 氏と C 氏によれば、Certificate III と Diploma では給与には大きな違いはないものの、できる業務に大きな違いがあり、さらに Certificate III では得る事のできない永住権への道筋が開ける。Diploma があれば、就学前準備講座にも立ち会うことができ、管理職の道も開け、その上で永住権に繋がるスポンサービザなどの取得も可能となる。4年制大学卒業程度の資格にあたる Bachelor は保育園の中でも数人しか持っていない資格で、これを取得することにより、就学準備コースを教える事もでき、また給与も園により差はあるが、1.5倍前後と大きく上昇する。

その一方、永住権に繋げるためにはそれぞれ規定の英語力が必要となる。入学に必要な英語力として、受講者は International English Language Testing System (通称 IELTS: アイエルツ) と呼ばれる試験を受ける事になる。Certificate III と Diploma では IELTS6.0 (各スコア5.5以上) が必要となり、Bachelor では IELTS7.5が必要となる。英語を母国語としない保育者は、多国籍の保護者と分かりやすい英語を用いたコミュニケーションをする必要がある。そのために、クイーンズランド州では保育者として永住権を得るためには IELTS という英語の試験ですべての項目で6.0が必要とされる。これは TOEIC だと780点、英検だと準1級に該当し、全ての項目で6.0以上というのは難易度が高いという。オーストラリアで保育士をしている B 氏へのインタビューをしたところ、10回以上 IELTS を受験し、苦手科目のリーディングで点数を取ることに苦戦していた。また、普段の保育現場の中では聞く、話す等で保護者とのコミュニケーションには問題がない一方、子どもの観察記録、日々の記録、保育指導案など、オーストラリアの保育指針を用い、法的に齟齬のない記録を書くため、文法ソフトをコンピューターに入れるなど工夫をし、それに対してオーストラリア人の同僚の協力は得られるとの事であった。このように英語を母国語としない保育者が主任保育士となった際、不安を軽減する方法が、オーストラリアでは既知のものとなっていた。

4. 留学予定者と一般学生の英語力の違い

本学では2023年度から留学予定者向けに海外保育留学事前準備講座を用意したが、留学1期生、2期生はそれを受けられず、英語はレベル別ではないランダムなクラス分けで、一般学生と同じ英語を1年時に、英語コミュニケーションを2年時に、3、4年時には選択者が英語上級を受けていた。留学ゼミ配属における初年度の判定には英語は関係しておらず、学生の希望と面接での留学希望者選考となった。しかしながら、本学の留学が進学希望の高校生に周知された留学3期生には、英語力が高い学生が保育留学を希望して入学することも増えた。そのため、保育留学が浸透した留学5期生にあたる現1年生の留学希望者と他の学生で英語力に差異があるのかを考察する。英語力の判定では英検 IBA を利用し、他学生との英語能力の比較を行う。留学を希望する学生の英語力は他学生に比べて高いのか、どのような点が上回っているのかを調べる。

4.1 英検 IBA について

英語力の比較には英検 IBA を用いた。英検 IBA とは「Institution Based. Assessment」の略で、日本英語検定協会が行っている簡易的で安価な英語テストであり、受験者全員に対しての総合及び技能別の CSE スコアがわかる。さらにグラフでスコアと各級レベル判定が掲載されるので長期に亘り、総合力と各技能の実力の変遷を知ることができ、指導にあたってレベル設定や技能別の時間配分の工夫などの目安になるテストとなっている。団体で学習成果を確認する際や、英検受験級の決定に役立てることができる英語テストである。本研究では1年生を対象に留学希望者13名と希望しない一般学生65名合計78名にこのテストを受験させた。

4.2 方法

2024年10月に留学希望者13名と基礎英語を受講中の大学1年生65名に英検 IBA を用いた英語力判定を行った。英検 IBA からリーディングとリスニングの点数が抽出されるものを選び、それについて各群の現状の英語力を比較した。本学では大学1年次の英語初級、中級は必修で、その後は英語と中国語の選択ができる。さらに大学3年次からは英語は自由選択科目のみとなる。そのため、英語力判定の比較は1年生とした。英検 IBA のタイプは英検2級から3級レベルを測るタイプBを選択した。タイプBのスコアはリーディングが550、リスニングが550で配点され、総合点は最低が0、最高が1100である。英語の成績については、留学希望者と一般学生の比較として、個人情報伏せられた状態で研究に用い

られることは口頭で説明を行った。

4.3 結果と考察

英検 IBA の全体平均成績は863であり、1年前の平均成績784、2年前の平均成績783を上回った。リーディングは428、リスニングは435で、いずれも前年、一昨年以上回る。分野別平均正答率は語彙・熟語・文法が36%、読解が39%、リスニングが48%で、語彙・熟語・文法が苦手で、リスニングが得意な学生が多いことが分かった。受験者の最高点は1067点で3年間の試験の中で最高得点であった。また最低点も733点で3年間の試験の中で一番点数が高かった。スコアレンジでは1000～1100が2名、901～1000が17名、801～900が50名、701～800が9名であり、最も人数が大きい801～900は英検3級合格レベル程度となる。全体の平均スコアは図1のとおりである。

1 年生全体の技能別平均 CSE スコアと
各級レベル判定値

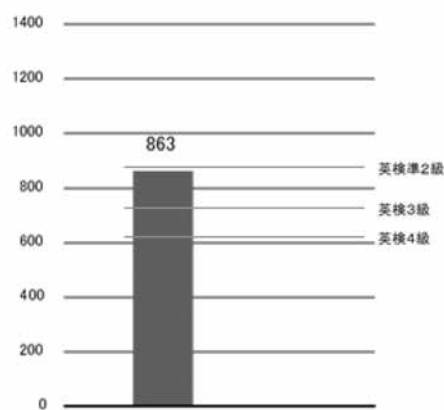


図1. 平均 CSE スコア

1 年生一般学生の英検 IBA の平均スコアは $M=856.4$, $SD=53.1$ 、留学希望者の1年生の平均が $M=897.8$, $SD=86.3$ であった。留学希望者の人数が13人と少ないため、各群における正規分布性と比較する両群での等分散を前提とするパラメトリックな検定条件を満たすことが難しい。このことから Wilcoxon の順位和検定を用いたところ、全体成績では有意差は認められなかった。そこで、リーディングとリスニングの成績それぞれで比較したところ、リーディングの平均スコアは一般学生が $M=426.4$, $SD=28.1$ 、留学希望者の1年生の平均が $M=436.4$, $SD=46.3$ で有意差は認められなかった。その一方でリスニングの平均スコアは一般学生が $M=430$, $SD=33.2$ 、留学希望者は $M=461.4$, $SD=47.5$ で p

表1. 英検 IBA の一般学生の平均スコアと留学希望者の平均スコアと分散分析

リーディング				リスニング			
水準	数	平均	標準偏差	水準	数	平均	標準偏差
一般	65	856.4	53.1	一般	65	426.4	28.1
留学希望	13	897.8	86.3	留学希望	13	436.4	46.3
Z =	1.4149			Z =	0.3563		
p =	0.1551			p =	0.7166		

<0.05水準で有意差が見られた(表1)。

留学予定者は元々英語が好きで、英語学習に積極的な傾向がある。その嗜好性と学習態度が英語の成績に影響を与えた可能性がある。リスニングの成績は留学希望者の方が有意に高かった。留学に興味を持ち、洋楽を聞いたり、動画を見ながら楽しんで学習する傾向が英語のリスニング力の向上に役立っているのではと考察される。リスニングは語学学習の鍵を握ると言われている。成人の日常生活における言語活動をまとめた Rivers (1984) によれば、成人は日常会話の40-50%を「リスニング」に25-30%を「スピーキング」に11-16%を「リーディング」にそして9%を「ライティング」に費やしている。すなわち、「リスニング」は日常生活において最も大きなウェイトを占める言語活動であることがわかる⁵⁾。しかしながら、留学を希望しない1年生のスコアが総じて低かったのかと言えば一概にそうではない。リーディングに有意差が見られなかったことは、留学を希望する学生もリーディング力は他学生と比べても高くないため、努力が望まれることが分かる。またリーディングのような単語力や文法理解が必要なものについては、長期的なスパンでの勉強が必要になるため、低学年の時から語学学習のアドバイスが望まれる。1年次からスコアを測定しておくことで、学生がオーストラリアに行きたいという目標をもった時に、自身の得意不得意を理解しながら語学学習に取り組むことが可能となる。

5. 学生の渡航前、留学後アンケートにおける語学学習の課題

留学を経験することで、学生達が語学学習得の技能を向上させ、精神的にも語学学習得に自信と意欲を高めることは複数の研究によって明らかにされている。4か月の語学留学の効果を検討した藤澤ら(2005)は留学生の留学前後の G-TELP のスコアの比較から、文法、リスニング、読解の伸び、特にリスニングにおける伸びが42.52%と著しかったとしている。また、学生の記名式の質問紙調査から、英語運用の自信に関して、特にリスニング面で

の伸びに対する自覚が多いとしている⁶⁾。

本研究では学生の英語学習に関して、渡豪してから毎月オンラインでの面談を行った。学生が英語学校に通った1か月ごとのインタビューで学生が感じている困難さ、またどのようにそれを克服しようとしているか、英語の中で得意だと感じている技能はどう変化するかを調査した。

5.1 方法

インタビューの協力者は5名(A～E)である。5名は2023年3月時点で本学の学部3年生4人、学部4年生1名で保育留学1期生としてオーストラリアで2月～6月1週目までは英語学校へ通い、それ以降は保育コースと保育実習に通っている。インタビューは、英語学習の経過が研究に用いられることを説明し、研究への承諾書を得ている。5名の協力者の許可を得て録音し、その後、文字化している。インタビューは、以下の3つの質問項目に基づき、半構造化面接法で行われた。インタビューは学生が英語学校に通学後1か月、2か月、3か月に分けて行った。

- ① 英語学習で課題に感じていることは何か
- ② 英語の弱点の改善にどのような努力をしているか
- ③ 英語学習でどの部分に自信があるか

5.2 インタビューの結果

上記の質問項目を中心に、インタビューの結果を報告する。以下、報告すべき内容をまとめ、次いで、具体的な発言を例示する。発言に文脈上、補足が必要な場合は、() 内に記す。

留学後1か月のインタビュー(2023年3月9日)

実質的には渡豪から3週間強ということもあり、この時期の学生は現地での生活に慣れることと同時に膨大な英語学習の課題に取り組んでいる。まだ留学生在活が未知のものであることから、発言は積極的なものが多く、楽しんで生活を送っている様子が分かる。先行研究でもるように、学生のほとんどがこの時期にリスニング力について自信をもっていた。文法は日本で英語学習が得意

だった学生はその優位性を継続しているように感じた。

- ① 英語学習で課題に感じていることは何か
 - A 英語の中で苦手なのは文法だが、少しずつできるようになっていると感じている。
 - B クラスの中で南米系の人には気軽に英語を話す。最初は（その雰囲気にもみこまれ）遠慮して話せなかったけど、話せるようになってきている。
 - C 授業は中級（クラスに配属）なので単語の意味が分からない時がある。
 - D （英語は）特に難しいと思わないが、やはり会話力は足りないと思っている。
 - E 会話は本当に続かない。Yes,No で答えるようなことしかいえない。文法はわかるけど。
- ② 英語の弱点の改善にどのような努力をしているか
 - A 教科書を携帯にインストールすることができ、どこでも勉強できるようにしている。
 - B 単語と単語を繋げて話すことを心掛けている。誰か（日本人に）助けてもらえると考えないようにしたら、逆に気楽になった。
 - C 喋るのはいいけど、文法が苦手なので、文法と単語をがんばっている。
 - D 英語のクラスは楽しい。楽しんでやるのが大事。
 - E とにかく一生懸命勉強すること。ふざけている人ややる気のない人にはイライラしている。
- ③ 英語学習でどの部分に自信があるか。
 - A 聞く部分（リスニング）。すべてが少しずつできるようになっていると感じる。
 - B スピーキング。話せるようになってきている。
 - C スピーキングとリスニング。
 - D 文法とリスニング。
 - E 文法とリスニングのテストは取れていた。

留学後2か月のインタビュー（2023年4月4日）

7月での対面インタビューの時に多くの学生から聞かれたのが、この2か月目が一番つらいという意見だった。現地の生活に慣れ、留学当初の興奮が治まり、英語に焦点を置いて日常生活を送る中、自分の至らない点が理解できるようになってくる時期であると考え。一方、多くの学生がこの時期に喋る力がついたと発言している。1か月目はリスニング、2か月目にリスニングができてからのスピーキング力の向上を感じている。文法や単語力の基礎的な力があるかないかがクラス決定に大きな影響を持ってくる時期でもあった。

- ① 英語学習で課題に感じていることは何か
 - A 文法。でもこれについてはあとでもいいと思っている。聞いて話せることが大事。
 - B 日本語でも話せないようなことを質問されるとフ

リーズしてしまい、固まってしまう。考えすぎて頭が痛くなったりする。顔がひきつっていると思う。

- C 英語力のびているかよくわからない。もともと話すことはできたので、それについてもあまり変化がないと感じる。文法も（のびたのかも）よくわからない。
 - D リスニングが弱い、リスニングができないとスピーキングには繋がらない。
 - E クラスが変わって（上に上がった）大変になった。みんなの話すスピードが速い。
- ② 英語の弱点の改善にどのような努力をしているか
 - A 今が頑張り時（この言葉が何度も出る）。今も図書館の帰り。私の部屋が家族の寝室に接しているため、家ではあまり勉強ができず、図書館に通うことにしている。
 - B クラスが上がって、初級クラスだった時の方が面倒見よかったと思う。語学が得意ではないのかもしれないと時々感じている。落ち込むときもある。
 - C ちゃんとテストで点数を取り、クラスが上がるようにしている。昨日のテストは問題数が少ないからだめかもしれない。
 - D 上級にいけるなら行った方がいいから今も努力している。英語力があるということは永住権にもつながるということだと思ってがんばる。
 - E みんなべらべら話せるし、前のクラスの方が楽だった。宿題も沢山出る。地道にやる。
 - ③ 英語学習でどの部分に自信があるか
 - A 話す力。日本にいた時より全然話せるようになっている。
 - B 話すこと。日本語で話してしまうときもあるけど、わりと英語で話せるようになっている。
 - C どこかのびたのかよくわからない。話すことはもともとできた。
 - D すべてにおいて伸びていると思うけど、文法（基礎）力があるのは大きいと思った。
 - E 単語、文法等は難しくないと感じている。

留学後3か月のインタビュー（2023年5月10日）

3か月目の特徴は、自分のふがいなさに向かい合った2か月目を越えて、自分の英語力に対しての他者の評価に気づき、それを意識しながらの語学学習となるところである。テストに関する焦りの発言が多いことも挙げられる。15週の英語学習を終えたら、次に保育留学コースに進む本学ならではの視点かもしれない。そのためかインタビュー中の口数も少ない傾向にあった。得意だと感じていることにスピーキングを上げる学生が多い。この

時期になると社会的背景の違いを理解することができていた。オーストラリアは察する社会ではなく、意見があることが重要であるため、話すことで自分の気持ちを表現しなくてはだめだと理解した学生はスピーキング能力が上がったと感じるようであった。

① 英語学習で課題に感じていることは何か

- A (保育留学にあがるために) 中上級に行かなければいけないプレッシャーを感じている。
- B 日本人だけの午後のクラスでは、ペアワークがうまくいかないこと。話しかけても日本語で答えられたりすると、ばかにされているように感じることもある。テストが心配。
- C 中上級のクラスに上がり、プレッシャーはないが、毎週プレゼンがあって用意が大変。
- D 発言をしすぎると言われる。他の子に合わせる必要があるかと疑問。英語力が伸びた自分にふさわしいクラスにいたいと思う。
- E クラスが上まらないこと。上のクラスに行けるかプレッシャーを感じている。

② 英語の弱点の改善にどのような努力をしているか。

- A 人と仲良くすること。英語で話すこと。図書館で自習もしている。
- B 苦手でもなんでもやるしかないと思ってがんばっている。一人の方が気楽。ペアワークで相手がやる気がないよりは (いいと思う)。
- C 英語の勉強には積極性が必要だと思う。黙っているのはだめ。
- D 日本にいると考えられないと思うけど、これは違うと思ったら声をあげる姿勢。それをするすることで英語力ものびていく。
- E テストもみんな一緒にうけるから、やるしかないと思ってやる。

③ 英語学習でどの部分に自信があるか。

- A 話すこと。友達がたくさんできた。
- B どこが得意なのかかわからないけど、がんばるしかない。
- C スピーキングとリスニング。
- D 話せるようになって、不得意と思うところがなくなった。
- E 文法と単語力はある。喋ることに慣れてきた。

5.3 インタビューの考察

学生がオーストラリアで語学学習を始めてから一番最初に伸びたと感じたところは、先行研究にもあるようにリスニング力であった。日本では体験できない、英語の膨大な音声のインプットが入ることで、まずリスニング力の伸びを1か月目に感じていた。2か月目は精神的な

大変さを感じる学生が多かった。渡航後の興奮期をすぎ、毎日語学学校に通う中で、自分の英語力の至らない点に気づくこともこの時期多い。しかしながら、この時期にスピーキング力がついたと答える学生が多く、リスニング力の次に伸びを感じるところはスピーキング分野であることが分かる。3か月目では個人の精神的成長が英語力の伸長に影響を与えていることが分かった。オーストラリアでは自分を表現しないと認めてもらえないことに気づいた学生は、自ら積極的に発言し、そこで身に着けた自信をさらに英語力に繋げていく傾向があった。

6. 結果の考察と展望

本研究では、オーストラリア政府が求める保育士の資格と英語力規定を調査した。また、留学前の学生の比較として、本学の留学希望者と希望しない学生の英語テストでのスコアを調べたところ、2群の間で留学予定者のリスニングスコアが高いことが分かった。また学生が留学後に行った1か月ごとの英語学習へのアンケートから、英語学習への取り組みでその時期ごとに学生が感じた課題について考察した。現状のオーストラリアの保育留学の課題と留学前の英語力の様子、留学後のアンケートの考察から、次年度以降の留学予定者が日本で行う課題について検討を行った。

日本でも近年外国人労働者の増加により、多国籍の園児を受け入れる園が多い。その一方、受け入れに苦慮している園も多く、保護者とのコミュニケーション、多文化共生の在り方についての方法を模索している。オーストラリアの園では多文化共生という言葉を特に意識しない。当たり前のように国籍の違う保育者が働き、様々な国籍の子ども達を受け入れている。日本人やフィリピン人が主任保育者をすることも多く、そのサポート体制は整っている。また、先住民の文化を保育の中に取り入れ、多国籍が当たり前である保育室内環境の設定も行われている。今後、日本で多国籍の幼児の受け入れが増える上で、多国籍が持ち込む様々な習慣や文化への当たり前の受け入れが必要とされる。本学がオーストラリアの保育士免許を取得するオーストラリア保育留学制度を作ることとは、海外で働く人材を作るというだけではなく、将来的に多国籍化が進んだ日本で多文化共生保育に対応できる保育者の育成に寄与しているともいえる。

その一方、現状のオーストラリアが直面している課題にも目を向けなければいけない。オーストラリア政府が保育に携わる人材が足りないからと言って、外国籍の働き手をそのまま受け入れているわけではなく、保育者としてオーストラリアの免許を取るためにも、高い英語力

が必要とされるようになってきた。学生ビザの大幅な値上げや、留学生数の規制など、現状は学生としての受け入れも厳しくなっている。留学生として現地に行く際も英語力は高い方がのぞましい。その後現地での保育資格をスポンサービザや永住権に繋げていくためには、より高い英語力証明が必要であり、大学在学時から留学後のことも意識して語学学習に励む必要がある。

入学時の英語力について、一般学生と留学を希望する学生の英検 IBA のスコアを調べたところ、リスニングのスコアが優位に高かった。横江（2023）によれば英語に対するモチベーションが高い学生ほど英語力が高くなる傾向があることが分かっている。英語テストの得点上位者にアンケートをとったところ、自由記述内容に含まれる単語の共起ネットワークに「外国・人・コミュニケーション」「グローバル化」「可能性」「自分」「海外」「将来・仕事・幅」などが表出しており、国際的志向性の高さが見てとれるとともに、英語を自分にとって大切なもの・可能性を広げうるものとして捉え、将来の仕事においても英語を用いてキャリアの幅を広げていくイメージを持っていることが横江の研究により示されている⁷⁾。本学でも同様の傾向が見られ、それには2つの理由が考えられる。1つは留学のために、独自に英語学習を行っているため、もう1つは元来英語が好きな学生が留学を目指すためである。一般英語での学生の様子と比較して、留学予定者は英語でコミュニケーションを取ることに意欲的であるのは間違いない。この意欲的な態度が英語力の伸長に最も大きな影響を与える要素であると考えられる。しかしながら、今回留学者と一般学生の差異を測ったテストはリーディングとリスニングのみであったため、英語に対する意識調査も同時に測ることで、留学予定者のどのような要素が一般学生との英語力の差に結び付くのかの判定が可能になると考える。また一般英語の授業時間の中で、留学予定者の英語に前向きな姿勢が、他の学生へも影響し、英語学習への積極的な取り組みに繋がるように工夫することもできる。

このように英語学習に前向きな姿勢であった留学予定者も、留学後は語学習得に関し、様々な課題と向き合うことがインタビューにより判明した。その課題は時期ごとに大きく異なっていた。留学後1か月目は最も英語ができない時期にも関わらず、留学生活への興奮から英語学習に前向きに取り組んでいる様子があった。また最初に変化したと学生が感じているのがリスニング力であった。2か月目が一番スランプを感じる学生が多く、自分の英語のできない部分に焦点を当てる傾向があった。その一方、この時期にスピーキングができるようになったと発言する学生が多い。最初はリスニング、次にスピーキング力の伸びを自覚する学生が多い傾向にあ

る。英語コースが終了する3か月目の学生の様子は、2か月目とは異なり、自己批評のみではなく、他者の目を意識した英語学習に変化していた。この時期、スピーキング力の伸びを意識する学生が殆どだったが、その中でも伸びたと強く感じている学生の特徴として、オーストラリア文化の受容があげられる。日本の「空気を読む」だけでは伝わらない文化を理解し、自分の意見を伝える重要性を理解した学生はよりスピーキング力が伸びる傾向にあった。言語習得において必要なことは、単なる単語や文法の習得のみならず、その言語が持つ文化的側面の理解が大きいことが示唆される。一方、単語や文法の力がついていることは、一部の学生の英語力の底上げに寄与していた。日本人が得意とする文法学習は留学後の英語試験の大きな助けになり、役に立つという認識ができたことで、今後留学予定者の英語学習法にも生かされられると思われる。

日本の社会構造の変化により、保育の場にも多国籍の園児の受け入れが広がる。多文化共生を既に行っているオーストラリアで見られるように、多国籍の園児、保育者が同じ園で働くことが日本でも行われるようになるだろう。その際に自国の文化を継承しつつも、他国の文化背景を受け入れ、様々な言語でコミュニケーションが取れる保育者の育成が望まれる。本学のプログラムで次世代を生きる保育者の育成を行う上で、一番重要であることは、多文化を受容できる力であると考えられる。英語学習においても、文化理解が柔軟な学生ほど英語力が伸びていくことを考えると、異なる文化を受容する力の重要性が理解できる。また、そのためには他国で学ぶという経験が学生に与える影響は大きい。11か月のオーストラリアでの保育留学を終えた学生が今後、その学びを保育の場で生かせるよう、日本帰国後の生活や就職面でのサポートも行っていく。また、今後保育実習の場での学生の学びの様子も報告し、日本の保育実習との違いを検証したいと考える。

注

- 1) 厚生労働省 政府統計 令和5年(2023)人口動態統計月報年計(概数)の概況 閲覧日2024年7月5日
- 2) 出入国在留管理庁 報道資料「令和5年6月末現在における在留外国人数について」令和5年6月末現在における在留外国人数について | 出入国在留管理庁 ([moj.go.jp](https://www.moj.go.jp)) 閲覧日 2024年8月10日～8月22日
- 3) 文部科学省 令和4年度報道発表「日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査」「日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査(令和3年度)」: 文部科学省 ([mext.go.jp](https://www.mext.go.jp)) 閲覧日 2024年8月16日

- 4) Australian Breau of Statistics (2021) About the Census.
閲覧日 2024年8月16日～23日
- 5) Rivers, W. 「What practitioners say about listening: Research implications for the classroom, in R. A. Gilman and L. M. Moody」『Foreign language Annuals』17, 1984, 331-334 引用ページ 332-333
- 6) 藤澤良行・小森道彦「中期語学留学プログラムの英語学力への効果に関する研究：日本の大学英語教育への提言」『大阪樟蔭女子大学学芸学部論集』42, 2005, 35-47
- 7) 横江百合子・山口香代子「日本人大学生の英語力と英語学習へのモチベーションに関する研究」『東洋学園大学紀要』31, 2023, 65-84 引用ページ 69, 80-81